

前期 B

〔国語〕

一、次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

歴史を考えると、すぐにぶつかる問題がある。それは、時間をどうやって認識するか、という問題だ。空間のほうは、視覚を通してかなりの程度カバーできるから、問題はすくないが、時間のほうは、直接認識することは、人間にはできない。

これは、われわれが日常経験することだけれども、このあいだ、なにかがあった、ということは覚えていても、それが二日まえのことだったのか、三日まえのことだったのか、一週間まえのことだったのか、一カ月まえのことだったのか、あるいは去年のことだったのか、そういうことになる、きわめてバクゼンとした記憶しかないのがふつうだ。

1 時間という、なにかわかったような気がしても、実はつかまえないのが時間だ。どれぐらいの時間が経過したかという、時間の長さを直接はかる基準がそもそもない。人間の感覚には、もともと時間をはかる機能はそなわっていない。だから時間を認識するためには、ただ一つしか方法はない。(A)、空間を一定の速度で運動している物体を見て、その進んだ距離を時間の長さに置きかえる方法である。だいたい「時間の長さ」ということば自体が、時間を空間に置きかえた表現だ。

その、時間を空間に置きかえるやりかたとして一番いいのは、なにか周期運動をしている物体を利用する。(B)、われわれが腕につけている腕時計だ。腕時計の針が一回りする時間の長さはいつもと同じだとカテイして、それで時間を区切って、目盛りの代わりにする。その長さが同じかどうかは、われわれには実証する方法はないけれども、同じだと考えることにしているわけだ。

2 地球が自分の軸のまわりで一回自転する空間のなかの運動を「一日」として、その間に地球が運動する距離の長さを時間の長さに置きかえて、時間の基本の単位にするというところから、時間の測定がはじまった。さらに、月が地球のまわりを回る公転一回転を「一月」と呼んで、これを一日より長い時間の目盛りとする。(C)、地球が太陽のまわりを回る公転一回転を「一年」と呼んで、これを一月より長い時間の目盛りとする。世界じゅうの人類は、だいたいこの三つの単位を使って時間に目盛りをつけ、時間の長さをはかってきた。地球の自転、月の公転、地球の公転の三つ以外には、てっとり早く時間の経過をはかる基準になる周期運動はないから、日・月・年が普遍的な時間の単位になった。

3 人間の一生のサイクルは、だいたいにおいて一年より長い。一年より長い時間を区切る方法は、自然界には簡単に見つからない。(D)「生まれた年から数えてなん年」というのはかりかたしできない。しかしこれでは、時間の区切りかたとしては普遍性がない。生まれた年は個人によってまちまちだし、死ぬまでの長さも個人によってまちまちだから。

4 そもそも時間というものは、ビッグ・バンで宇宙が生まれたときに、空間とともにはじまったものだそうだが、すくなくとも人間が経験で知っているかぎりの世界では、時間にははじめもなく、終わりもない。これがほんとうの最初の年、最初の月、最初の日というものは、人間には知られてない。言いかえれば、そこから数えれば「なん番めの年」になり、「なん番めの月」になり、「なん番めの日」になる、と言えるような、わかりやすいメヤスになる時点は、自然界には存在しない。

そういうわけで、たくさんさんの人間が寄り集まって、どの時点から数えることにしようかと協定するか、だれかに適当に決めてもらうしかない。こうした取り決めが「クロノロジー(年代)」というものである。

時間というものは、そういうふう、きわめて人工的なはかりかたしできない。自然界には、絶対的な時間の経過を示すものは、なにもない。

5 人が「いまだ」と思ったときが「そのとき」だというのが、そうした社会の時間の感覚である。こうした時間の感覚は、絶対的な時間とか、時刻とかに置きかえることはできない。それが人間本来の、時間の自然な感じかただ。

たとえば、いまでもオーストラリアのアボリジニの社会では、お祭りのはじまる時刻は、夜ということぐらいは決まっているが、なん時ちょうどにはじまるなどということは、だれも申し合わせていない。祭りの場に集まってがやがややっているうちに、なんとなくみんなが気分がコウヨウしてきて、そろそろだと思つたときがそのときだとなって、お祭りがはじまるというのがふつうだ。

(E)、日記をつけるということもなかった時代には、自分がなん歳かだつてわかるわけもないし、誕生日を覚えている人もほとんどない。東アジアで誕生日のキャンネンが発生したのは、記録にあるかぎりでは、唐の玄宗皇帝が七二九年、自分の誕生日を祝つて「千秋節」と呼んだのがはじめてで、七四八年には「天長節」と改称している。それ以前には、誕生日を意識することはまったくなかったらしい。

われわれ現代人の感覚では、時間というものは、無限の過去からはじまって、規則正しくチクタクチクタクと、同じ歩調で現在にむかって進行してきて、現在からは、無限の未来にむかって、チクタクチクタクと同じ歩調で一直線に進行していくものだ、となっている。

2
こうした時間の感覚は、決して自然なものではなくて、文明が創りだしたものだ。明日という日が来るかどうかは、ほんとうを言う
うと、だれにもわからない。そういう時間の感覚のほうが自然だ。というわけで、人間にとっては、時間は取り扱にくいもの
が、その取り扱いにくい時間がかかってくるのが歴史なのである。
(岡田英弘『歴史とはなにか』による)

問一、波線部 a ～ e のカタカナを、漢字に改めよ。

問二、空欄 (A) ～ (E) に入る最も適切な語を次の中から選び、記号で記せ。

ア したがって イ たとえば ウ それは エ せいぜい オ さらに カ まして キ いったい

問三、傍線部 1「時間のほうは、直接認識することは、人間にはできない」と同じ内容を言い表している文中の部分を三十字以内で
選び、始めと終わりの五字(句読点は含まない)を記せ。

問四、1 ～ 5 に入る最も適切な文を次の中から選び、記号で記せ。

ア これはなぜかという、時間には目盛りが無いという、時間の本質から来ている。

イ 歴史は、世界を空間だけに沿って見るものではなくて、時間に沿っても見るものだ。

ウ そこで、個人の範囲を超えた時間を、どうやって管理するか、という根本的な問題が起こる。

エ そこまでいい。そのつぎに、重大な問題が待ち受けている。

オ だから、時計とか暦とかのない社会では、時間の経過を決めるのは人間の気持ちによる。

カ 腕時計の針の運動の原型は、天体の運動である。

キ 歴史の成立には、もう一つ、ひじょうに重要な条件がある。

問五、傍線部 2「こうした時間の感覚は、……文明が創りだした」とあるが、何のためにどのようにして創りだされたのか、次の

〔語群〕の語句を上から順番に使用しながら、六十字以内で説明せよ。

〔語群〕経過 認識 天体 単位 年代 時点

二、次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

八月七日、金曜日。七時を回っている空からは、何にも遮^かられていない太陽の光が差し込んでいる。(A) 真新しい日差し。夏でも午前中の太陽は気持ちがいい。

天気予報は外れだ。昨日の夜のニュースでは、明日は一日天気が崩れると言っていたし、星の少ない夜空を見上げながら俺も雨だと予測していた。小学校も中学校も卒業式は大雨だった。駅伝の県大会は小雨ですんだけど、何かが終わる日は、雨の確率が高い。今日だって、(B) 雨が降るのだと思っていた。

それなのに、すっきりと迷いもない晴れ。これだけ科学が進んでいるのに、翌日の天気すら当てられないのだ。たかだか十六年分の俺の経験から、想定できるものなどない。明日や未来は、まるで読めない。俺が子ども相手に走り回ることになるなんて、だれが想像できただろう。最後の日に胸を痛めることになるなんて、(C) 思い浮かべることができただろう。

晴れでも雨でも、今日がやって来たのだ。ぐだぐだ言っではいられない。そろそろ用意すつかと体を起こそうとして、思い出した。昨日走ったんだ。足が張っているし、腰が重い。普段から走りはしているけど、一人で走るのは全然勝手がちがう。必死でがむしゃらに一切手を抜かず走ったのは何年ぶりだろう。翌日に持ち越すほどの疲れは、久しぶりだ。

「明日、奥さん退院なんだね」
リビングに行くと、おふくろがそう言った。

「ああ、そうだな」

「よかったわね。無事に退院できて」

「ああ」

「ってことは、今日でバイト終わりなんだっけ？」

「まあな」

俺はグラスに牛乳を注いで席に着いた。最終日だからか、テーブルにはおふくろが作ってくれたサンドイッチが並んでいるけれど、食欲はわいてこなかった。

「ほぼ一か月かー。長いようで短かったね」

「そうだな」

泣き叫んでばかりの鈴香に途方に暮れていたのが、ついこの間のように思える。鈴香が俺に近づいてきたのに、二人のリズムもできてきたのに、もう一緒に過ごすことはない。時間はどうしていつも公平に正しく過ぎるのだろう。あと少し鈴香とやりたいことがある。もう少し鈴香の顔を見たい。そう思ったって、猶予はなく時間は針を進めていく。

「まさか二年も三年も面倒見るつもりなんかないでしょう」

「そりゃそうだ」

俺はごくりと牛乳を飲んだ。

「だったら、そんなしけた顔しないで。鈴香ちゃんによろしくね」

おふくろは玄関に向かいながらそう言った。

いつもは走る鈴香の家までの道を今日は歩いた。ゆっくり進んだところで、時間が待ってくれるわけでもない。俺がどんなふうにしていったって、ときは進んでいく。それでも、急ぎたくはなかった。

面倒なバイトが終わるだけだ。明日から遅くまで寝ていられる。そんな言葉を浮かべたって、俺の頭を素通りするだけだ。鈴香のもとへ行って、鈴香と遊んでご飯を食べる。公園で走り回って、お母さんたちと話し、夕暮れの街を鈴香と歌いながら帰る。その生活が今の俺のすべてだ。

ぶんぶりと喜ぶ鈴香の顔。一つ一つ増えていく言葉。ぎゅっと俺の指を握る小さな手。あやふやなくせに自信満々に歌う歌。おいでと腕を広げれば、まっすぐに走ってくる姿。夏はまだ残っているというのに、それらをすべて手放さなければいけないのだ。

寂しい、悲しい。そういう言葉はピンとこないけど、体の、生活の、心の、ど真ん中にあつたものを、するつと持っていられるよ
うな心地。

今の日々³に代わるものがあるのだろうか。俺はそれを見つけられるだろうか。(瀬尾まいこ『君が夏を走らせる』より)

問一、波線部a～eの読みを、ひらがなで記せ。

問二、空欄(A)～(C)に入る最も適切な語を次の中から選び、記号で記せ。

ア すぐに イ かなり ウ まだ エ どうして オ いまにも カ きつと

問三、傍線部1「俺も雨だと予測し」た理由について、「ニュース」、「経験」、「バイト」という語句を用いながら、八十字程度で記せ。

問四、傍線部2「鈴香が俺に近づいてきた」について、鈴香の行動は具体的にどのように変化したか、本文中の言葉を用い、記せ。
問五、傍線部3「今の日々³に代わるもの」について。

①「今の日々」を具体的に説明した連続する二文を抜き出し、その始めと終わりのそれぞれ五字(句読点を含む)を記せ。

②「今の日々³に代わるもの」を「俺」は見つけられる確信が得られていない。その理由について「俺」にとって「鈴香」と過
ごす「今の日々」がどのようなものになっているかを踏まえながら説明せよ。

前期 B

〔国語〕

問五			問四	問三	問二	問一
			1		A	a
			2			
					B	b
			3			
			4			
				5	C	c
					D	d
					E	e

一、

問五		問四	問三			問二	問一
②	①					A	a
						B	b
						C	c
							d
							e

二、

受験地	受験番号							得点欄
								※

※は記入しないこと